

市では、市内の学校に通う児童・生徒に小諸のことをより知ってもらうため、副読本として「こもろヒストリー」を作製しました。ここでは、その一部を連載してお伝えしていきます。

HISTORY №8 商都・小諸

小諸は、中山道から分かれた北国街道、佐久甲州街道が交わる大事な場所でした。

交通のかなめとなる町には人が集まり、呉服・塩・荒物・米などの販売、味噌や醤油、酒づくりなどの商いが盛んになり、小諸が発展していきました。

明治26年に碓氷峠が鉄道で結ばれると、生系の産業が盛んになりました。小諸の製糸場「純水館」には、2千人をこえる人たちが働いていました。

サキウ
酢久商店



江戸時代から味噌、醤油などをつくり、墨表、塩などの問屋としても栄えていました。主の小山久左衛門は、製糸場「純水館」を建てて小諸の製糸業を盛んにしました。

さらに、御牧ヶ原の開発に力を注いで、田畑や植林、いくつものため池を築きました。

公共のためにたくさんの寄附をし、小諸小学校を建てる土地（現在市役所のある場所）もその一つです。「酢久商店」は、現在も「酢久商店」「信州味噌株」として続いています。

純水館製糸場と従業員



小諸銀行



本町にある「萬屋骨董店」よろずや こつどうてんは、明治時代に小諸銀行として使われていた建物です。小諸には、「布施銀行」「小諸貯蓄銀行」「塩川銀行」「志賀銀行」「六十三銀行」などがあり、特に小諸銀行は、佐久地域の中心的な銀行でした。銀行はやがて合併して、小諸銀行から「信濃銀行」になり、不景気になると、信濃銀行もなくなり、県内では上田の「十九銀行」と長野の「六十三銀行」が合併して「八十二銀行」ができました。



超大作

全12回

私が住むまち

小諸の歴史

K O M O R O
H I S T O R Y
歴史の なかに、 未来の ひみつが 横た わっている